



## 研究専門委員会の活力を 結集し、課題研究へ

### Collaboration between Technical Committees for Solutions Research

副会長 安藤 真

副会長に就任して既にほぼ1年を経過しての巻頭言執筆ですが、会員の一人として学会の現状を眺め、研究専門委員会の活動に絞り、問題意識とともに学会活性化への私見を書いてみます。

今や情報通信技術（ICT）は社会を支えるインフラストラクチャとして、空気のような存在となっています。電子情報通信学会は、その名のとおり ICT を対象にした総合学会であり、成熟した日本において、快適な社会の実現、学術と産業の振興、人材の育成、政策への寄与、国際貢献など、ICT を基盤として実現が期待される役割は限りなく広がっています。特に近年は、少子高齢化、地球温暖化や防災の観点で人間や社会の具体的な問題を克服する取組みの中で、学会もこれまでにないほど、課題指向型の研究開発で真価が問われるようになっていきます。

例えば私の専門である無線通信では、同報性で無線が他を圧した放送の時代、高速大容量化、長距離化で光通信に後じんを拝した時代を経て、移動体通信というライバルのいない土俵を得、高周波数化や時空間信号処理の進化によりスペクトルの有限性をも克服する研究が花盛りです。実は15年前に会誌に寄稿した当時は、コンテンツ不足で多チャンネルを持て余す有様でしたが、降って湧いた感のあるインターネットの到来で人ばかりかもの（マシン）までがつながり伝送路に対する大容量化の要求は永遠に肥大し続けるようです。一方、近年は、災害時重要通信や人体通信、センサネットワークへの適用として、逆により低い周波数、より低消費電力、より低速な伝送も制度化され研究の対象となってきました。このように課題主導で展開される研究は、デバイス、回路、電力からネットワークまで含む学際的なものが多く、本会の懐の広さが生かせる課題ではあるものの、研究専門委員会一つでは容易にカバーできないものが増えていきます。本会の特徴であり、学術的な水準を維持する最も重要な組織は、80にも及ぶ深い専門により区分けされた研究専門委員会です。各研究専門委員会は縦糸の活動として、それぞれの専門分野で学術的な深化を担ってきたからです。

本会の研究活動は、「研究会」「大会」「論文」の三つに特徴付けられます。約3万2,000名の会員の中で、いわゆるアクティブな会員は約1万名であり、「研究会」では発表約1万件と技報予約購読約1万2,000件、「大会」では発表約5,000件、これらのゴールとしての「論文」では約2,000編の掲載があります。データによると、会員数や技報の予約数において企業からの寄与が減少する中で、研究専門委員会と距離が近いアクティブ会員によるであろう「研究会」と「大会」の発表は、その数が維持されています。ちなみに、残りの約2万人の会員は、主にこれら研究開発の成果を社会実装の目的で活用する立場におられ、例えば、約1万2,000件の技報予約購読や、和英論文誌の約33万件のアクセスとともに支える重要なユーザともなっています。

昨今の会員数の低減、技報の予約数の下降が、産業界から見た学会の魅力の低下によると捉えると、課題主導テーマに応える横糸の活動を強化することも重要と思われます。縦糸を追求してきた研究専門委員会がその強みを失うことなく企業等に魅力の発信ができるのは、大会における特定課題に対する複数の研究専門委員会の合同セッションの企画、臨機応変に時限を設けて作られる研究専門委員会による「研究会」などであり、学会として応援の価値があると思われます。

身近でかつ本会の宝でもある「研究会」をてこに会員増強や産業界への魅力発信について私見を書きました。ソサイエティを横断して設けられた「学会のあり方タスクフォース」の成果に着目しつつ、会員皆様の忌憚のない御意見をお待ちしております。